

筆者が京都の小さなアパートの一室で、そのニュースを聞いたのは、平成元年（1989年）2月23日の朝のこと。ちょうど、2月24日の大喪の礼を前に、社会全体が自粛モードで、ただならぬ雰囲気覆われている最中だった。ラジオから突然流れた考古学者、佐原真氏（奈良国立文化財研究所・当時）の声は、まるで九州で邪馬台国が見つかったかのような興奮した口ぶりで、大手の新聞も、「最大級の環濠集落発掘」、「望楼や土塁確認」、「倭人伝と対応」、「邪馬台国時代の‘クニ’」などと、吉野ヶ里遺跡の発見をトップニュースとして扱った。吉野ヶ里遺跡に関する報道は、この第一報の後も過熱気味に続き、5月7日までの一般公開期間（2ヶ月弱）には110万を超える見学者が現地を訪れ、沿道には臨時の商店が立ち並んだ。こうして‘吉野ヶ里フィーバー’とも呼ばれる社会現象がにわかに巻き起り、遺跡保存を求める署名は10万筆を数えた。この状況をみた香取熊雄・佐賀県知事は、急遽、遺跡の主要部分を国史跡として保存する方針を固め、翌平成2年（1990年）5月に国史跡に指定、さらに平成3年（1991年）4月には特別史跡に指定と続き、平成4年（1992年）には国営公園として整備されることが閣議決定された。

全国的な注目を集めたこの一連の出来事は、後日、NHKのドキュメンタリー番組「プロジェクトX～挑戦者たち～」で取り上げられ、「王が眠る神秘の遺跡～父と息子・執念の吉野ヶ里～」として、平成14年（2002年）に全国放送された。番組は、再現映像を織り込みながら、「数々の困難を乗り越え故郷の誇りを取り戻そうと、必死に大地と格闘した父子の30年に渡る情熱の物語」として構成され、発掘調査を担当した七田忠昭氏もスタジオのゲストとして出演した。吉野ヶ里遺跡は、工業団地造成のため、1986年から発掘調査が続けられ、1987年頃だったか、筆者も、列状の甕棺墓群が延々と600mにわたって見つかった発掘現場の様子を見学させてもらったことがあった。その後、調査が進み、濠や柵列の内側に物見櫓・高床建物などが立ち並ぶ「南内郭」の姿が次第に明らかになるとともに、平成元年（1989年）の年明けには、いよいよ、工事着工のために発掘調査現場を明け渡す期日が迫ってきた。当初から遺跡の全面保存を訴えてきた「佐賀の自然と文化を守る会」が1月23日、県知事、文化庁長官に陳情書を提出するが、1月25日には工事の起工式が行われ、工事着工が2月15日と決定した。NHKの番組で焦点が当てられたのは、調査担当の七田忠昭氏がブルドーザーの運転手に頼み込んで工事の着工を待ってもらい、その間に、弥生時代研究の第一人者の佐原真氏に現地を視察してもらったことで、情勢が一挙に変わり、最終的な遺跡保存に結びついたという感動的なエピソードだった。

実は、工事着工直前の2月12日、遺跡の現地に立ったのが、偶然、シンポジウムの打ち合わせのために佐賀に来ていた金関恕先生だった。邪馬台国の王国の姿を彷彿させるような遺跡の姿を目にした金関先生は、工業団地の敷地として遺跡が消滅の運命にあることを知り、奈良に戻ったその夜に、ジャーナリズムとも付き合いの深い盟友の佐原氏に遺跡の視察を勧め、上京の折りには文化庁に駆け込んで、担当の技官に保存を訴えた。

「吉野ヶ里はすごい。はやく見に行きなさい。濠が二重になっていて、濠の張り出し部分には物見櫓がある。あんな素晴らしい遺跡を壊しては申し訳ない。できたら保存の方向に持って行くべきではないか」。金関先生のこの言葉を受けた佐原氏のその後の活躍はめざましく、2月22日に現地を視察し、取り囲む報道陣に遺跡の重要性を熱く語り、その映像が、翌日の全国ニュースとして配信されたのだ。金関先生の言葉がなかったら、そして、その後の佐原氏の行動がなかったら、現在の吉野ヶ里遺跡はなかったと七田忠昭氏は述懐する。

さて、吉野ヶ里を題材にしたNHKの番組「プロジェクトX」では、七田忠昭氏の亡父、忠志氏にも焦点が当てられた。七田忠志氏は、戦前には森本六爾氏が主宰した東京考古学会の同人として活躍し、戦後は、地元の神埼高校で社会の授業を担当しながら、考古学の研究を続けていた。神埼高校で七田氏の教えを受け、埋蔵文化財天理教調査団に勤務する池田保信氏によれば、木訥としたその授業の様子は、番組の再現映像のとおりだったという。昭和28年（1953年）には、吉野ヶ里遺跡北方の三津永田遺跡が、豪雨で決壊した城原川の堤防復旧工事のための土取場となり、七田氏は、工事に伴って連日多くの甕棺や人骨などが出土したことに対応した。旧知で人類学者の金関丈夫博士（九州大学医学部）に応援を求めたのがきっかけとなり、息子・金関恕先生（当時は京都大学大学院在学中）や坪井清足氏（奈良国立文化財研究所）による緊急発掘調査が行われた。平成元年（1989年）、吉野ヶ里遺跡に立った金関先生は、すぐ近くの三津永田遺跡で、工事中の崖面に露出した甕棺墓を、命綱をかけて宙づりになって調査した若き日の記憶がまざまざと蘇ったという。

七田忠志氏の遺志を継いだ息子、忠昭氏が発掘調査を担当した吉野ヶ里遺跡は、平成13年（2001年）4月、「国営吉野ヶ里歴史公園」として、環濠や建物群の一部が復元されて開園し、平成21年（2009年）2月には、環濠集落のほぼ全域が再現された。国営公園の拡充はその後も続き、環濠集落の北側に位置する甕棺墓群の整備にあたっては、未発掘の区域に設置された説明板で、天理



整備された吉野ヶ里国営歴史公園

は、1月1日～

2月16日、吉野ヶ里遺跡の史跡指定30周年を記念した特別展が開催され、知名度抜群となった遺跡のこれまでの軌跡を振り返りつつ、未来が展望された。「遺跡がただ保存されるだけでなく、その存在が現在の生活のなかで生きるよう、人々が何かを考えるきっかけになるように」という金関先生の思いは、さまざまな経緯を経て、未来へと受け継がれようとしている。